

フランス語の代名詞“ON”の 使用について*

土井 隆 広

はじめに

このところ代名詞 on についての研究が盛んになっている。拙論土井（1989）のほか山口（1989）、杉山（1990）、TAMBA-MECZ（1989）などが相次いで発表され、on の諸特徴が明らかにされつつある。しかし、まだ on についてすべてが解明されたとは言い難い。on の人称性・指示性に関しては TAMBA-MECZ（1989）によってほぼすべてが言い尽くされたと思われるが、代名詞体系の中での on の位置付け、ce/ça/il/ils といった他の代名詞との機能比較など考察すべき点が少なからず残っている。

on の使用に関する問題については、受動文との使い分け（山口（1989））、談話における主題の流れ（杉山（1990））などの観点から興味深い分析が行われているのだが、情報伝達の観点からのアプローチである土井（1989）と同様、問題の一面を明らかにするものでしかないという感を免れない。

小論は、土井（1989）で示した考えを発展させ、on の使用上の特徴を探ろうとするものである。on の言語記号としての価値とその使用の原則を整理した後、on の代表的使用と思われる3つのパターンを取り上げ、それに考察を加えてゆく。「話者はいかなる場合に on を使用するのか」、言語使用の様々な側面と係わるこの複雑な問題を解明するための足掛かりを作りたいと考えている。

なのか。何でもできるというのは何もしていないことではないのか。事実、上に挙げた例を見れば分かるように、on の人称なり意味なりは on 自身によって決まるのではなく、述部の要素や文脈がそれを決定するのである。この現象を踏まえ、小論では on の言語記号としての価値を次のように規定する。

- on は人称・性・数に関する情報を提示することではなく、主語を単なる「人」としか表示しない言語記号である。

ATLANI (1984), 西村 (1987), TAMBA-MECZ (1989) もこの点についてはほぼ同様の結論に達している。

1.2. ON の使用原則

「on の言語記号としての価値」から導き出せる on の使用原則は、簡潔な言い方をすれば、次のようになるであろう。

- 事行・事態の主体^(a)を明示しない。

この主体を明示したいのであれば、また明示する必要があるのであれば、話者は on のような言語記号ではなく、明示的な表現である実詞や人称代名詞を使用することであろう。

この使用原則が適用されるためには、この原則を支持する文脈なり状況が必要である。原則として、主体を明示すべき文脈・状況でそれを明示せずに済ませることはできない。コミュニケーションが支障なく成立するためには、文脈・状況が許す範囲で言語記号の選択を行う必要がある。小論では on の使用原則が適用される文脈・状況とは次のようなものであると考える。

- 単に「人」と提示するだけで、事行・事態の主体について了解が成り立つ文脈・状況。

ここで言う「事行・事態の主体について了解が成り立つ」とは、主体についてそれが「誰」なのか定的に同定が可能であるという意味ではない。定・不定とはまったく関係がなく、on が「誰かは特定できない大体は分かる人々」であ

っても一向に構わない。話者一聴者の間でそういう理解が自然に成り立てばよいのである。この「事行・事態の主体について了解が成り立つ」現象は極めて興味深いものである。主体を単に「人」と表すだけで、なぜそれについて「了解」が可能となるのか。このメカニズムについては TAMBA-MECZ (1989) や青木 (1989) の中に散見されるが、これを正面から論じた研究はまだ現れていない。今後の課題として考察してゆきたいと考えている。

2. ON の使用パターン

本章では、on が実際の会話や文章の中でどのように使用されるのか、また on の使用原則がどのように適用されるのか、その代表的なパターンについて考察する。

on の使用に関しては、従来、on が表す意味に基づいた分類がなされてきた。すなわち、1.1. で述べたような「意味」による分類を行い、それに用例を豊富に添えるというものである。これでは on という単一の言語記号が実現する用法の驚くべき大きさが示されるだけで、on の特性は捉えられない。小論では on の使用を別の角度から捉えたいと思う。意味による分類ではなく、使用のされ方による分類を行いたい。それは、受動態の代替としての on の使用、効率的な情報伝達のための on の使用、情意表現のための on の使用の3つである。

2.1. 受動態の代替としての ON の使用

能動文において on を主語に立てると、文が表す事行の行為主体に関して人称・性・数に関する情報がまったく示されないことになる。言い換えれば、行為主体のマークはあるが、その内実が示されない文ができあがる。この点で、行為主体を示さないための統語的な手段である受動態と on は極めて近い関係

にあると言える。事実、受動態の代替表現として *on* が取り上げられることは多い⁽⁴⁾。次の (09)(10) の a, b は意味的にほぼ等価値であると言える。

- (09) a. Le français est parlé au Canada.
 b. *On* parle le français au Canada.
 (10) a. Le prisonnier sera interrogé.
 b. *On* interrogera le prisonnier.

フランス語では受動文を作るのにいくつかの制約があり、英語のように広範囲に受動態を用いられないことが *on* が受動態の代替となる一因でもある。

例えば、フランス語では間接目的補語を主語にして受動文を作ることができない。直接目的補語を主語に立てた受動文を作るか、そうでなければその他の表現手段に頼ることになるが、後者のひとつとして *on* が現れる。

- (11) *On* lui a volé sa valise à la gare.
 (12) *On* m'a donné votre adresse.
 (13) *On* lui retire son platre demain matin (...) (MODIANO, p.009)

また、「知覚動詞＋直接目的補語＋不定詞」の構文においても直接目的補語を主語にした受動化ができず、上と同様の現象が生じる。

- (14) *On* m'a vu bailler pendant le cours.
 (15) *On* le verra remonter et redescendre jusqu'à neuf heures du soir (...) (MODIANO, p.010)
 (16) La nuit est chaude et *l'on* entend gronder un orage lointain. (MODIANO, p.016)

フランス語の受動態が本質的に行為の表現手段ではなく、状態の表現手段であるため⁽⁵⁾、未完了相を表すのに *on* を用いた文が使用されるということもある。

- (17) A : Eh, Yvonne. Cache-toi. Les soldats passent.
 B : Pas de danger pour moi. Je ne suis plus jeune.

- C : Au secours! *On* enlève Madeleine. (NHK, 10, 1981)
 (18) — Ne bougez pas... Ça va aller vite...
 Mais *on* ouvrait une portière. (MODIANO, p. 049)
 (19) *On* distinguait à peine le coude, le front et la main. (MODIANO, p. 058)

受動態の代替としては *on* を用いた表現だけではなく、*se faire*+*inf.* や代名動詞なども考えられる。しかし、これらは受動の表現、つまり行為が及ぼされることを表す表現としては異質であり、受動態の代替とはなりえないようである⁽⁶⁾。

例えば、*se faire*+*inf.* は基本的に主語として設定される者がその受ける動作の発生に多少とも係わりを持っていることが含意される表現であり、従って(20)(21)には単なる統語的言い換え以上の、意味に係わる大きな差がある。

- (20) Paul est remplacé par Jean.
 (21) Paul s'est fait remplacer par Jean.

代名動詞については、能動の転換としての受動ではなく、物・事にある動作が生じるかどうか一種の可能性の判断を表す表現であり、行為者は不特定で、動作主補語を加えることが難しいということを考えると、受動態とは異質の表現であり、代替関係にはないと言えるであろう。

- (22) Deux espèces de hérons se trouvent dans nos contrées.
 (23) Deux espèces de hérons sont trouvées dans nos contrées.

on はアスペクトを別にすれば、*se faire*+*inf.* や代名動詞に比べて、受動態の代替表現として極めて有効なものと言える。しかし、有効ではあるが、まったく等価値というわけではない。行為者を明示することなく行為を述べるという点では受動文と *on* を用いた文は等価であるのだが、情報伝達の観点から見れば、情報の構造からして自ずと違いが生じるのである。この違いは談話の中で発現するもので、大きな違いとなる。

(24) (Au commissariat)

— Allez, Monsieur, du calme! Alors, qu'est-ce qu'il y a?

— *On* m'a volé mon passeport, mon portefeuille, mon appareil photo, enfin tout!

— Ça s'est passé quand et où?

— Tout de suite là. Devant la gare!

— *On* vous a agressé?

— Non. Je me suis arrêté un moment pour regarder le plan de la ville, et tout à coup deux types sont arrivés à moto... Ils m'ont tout pris!

(GUIDE, p. 176)

この会話の中での *on* は受動態と代替関係にはない。*on* の発話を受動文で表せば、その表すところが大きすぎてしまうことは明らかである。両者の間には伝達の力点がどこにあるのかについて大きな差があるからである。これは次節の内容と関係することである。次節の中で触れることにしたい。

2.2. 効率的な情報伝達のための ON の使用

情報伝達の観点からは、焦点となる情報、新しい情報は文の終わり近くに位置付けるのが原則である。このような情報を担う要素を文頭に設定すると、文法的には適正であっても実際の使用では容認されにくい文ができあがる。

(25) ? À Kanda, beaucoup de livres d'occasion sont vendus. (泉, p. 137)

(25) の容認度を高めるには à Kanda を文末へ移動させるか, beaucoup de livres を文末へ移動させて別の主語 (*on*) を立てる等の変形が必要である。

(26) Beaucoup de livres d'occasion se vendent à Kanda.

(27) Beaucoup de livres d'occasion sont vendus à Kanda.

(28) À Kanda, *on* vend beaucoup de livres d'occasion.

on は人称・性・数に関する情報を提示することがなく、主語を単に「人」と表す機能語に近い言語記号である。従って、*on* を主語にした文は、情報の構

造からして、述部の情報が剥き出しになった文であると言うことができる。このことと上に述べた情報伝達上の原則を考え合わせるならば、on を主語に立てた文は焦点となる情報や新しい情報を伝えるのに好都合な構造を成すことになる。事実、この目的で使用された on の用例は数多い。

- (29) — Vous êtes de la maison ?
 — Non, justement. *On* m'a passé un ticket et je me sens un peu gênée...
 (ふらんす, 05. 1988)
- (30) *On* y lisait : VACANCES EN ENGADINE. (MODIANO, p.055)
- (31) *On* s'est aperçu trop tard que celle-ci y avait déversé tout ce qui lui tombait sous la main, y compris des produits dont les industries de la région se débarrassent comme elles peuvent. (L'Humanité, 31. 05. 1980)

上に挙げた例では、新しい情報、焦点となる情報が文の終わり近くに設定され、効率的な情報の伝達が果たされている。これらの例では伝達の中心はずべて直接目的補語もしくはそれ相当の節であるが、述部全体が伝達の中心であると見なせる例も多い。

- (32) Qu'est-ce que c'est que ça! *On* veut me tuer? (NHK, 10. 1981)
- (33) — Alors, il paraît que vous avez fini votre service militaire? demanda la brune à queue de cheval.
 — Oui. C'est fini...
 — Vous êtes resté ici, à Saint-Lô?
 — Oui.
 — Moi, je crois qu'il vaut mieux être dans la marine... *On* voyage.
 (MODIANO, p.026)
- (34) A : Eh, Yvonne. Cache-toi. Les soldats passent.
 B : Pas de danger pour moi. Je ne suis plus jeune.
 C : Au secours! *On* enlève Madeleine. (NHK, 10. 1981)

伝達の中心となる要素が新しい情報であるだけでなく、古い情報も伝達の中心として設定されることがあること、また述語動詞さらには述部そのものが伝達の中心になりうることを考えれば、on の使用は単に新しい情報や焦点となる

情報を文の終わり近くへと設定するための手段であるというよりも、述部が担う情報全体を伝達の中心とするための手段であると考えほうが言語事実の説明として包括的であるように思われる。前節終わりで扱った受動態と *on* との使用上の差もこのことと関係している。既に指摘したように、両者には伝達の力点がどこにあるのかについて大きな差があるのである。受動態では「被行為者が行為を被る」ことを伝えるのに力点が置かれるのに対し、*on* では述部が表す情報「何らかの行為を行う」が伝達の中心なのである。単文として捉えるときその差は判然としないが、談話の中においてこの差は決定的なものとなる。そのために両者は談話の中で代替が不可能となるのである。

nous の代用であると説明されることの多い *on* の使用についても、この枠の中で捉えるべきであると筆者は考える。この種の *on* は「動詞語尾の節約」、「口語的な用法」等と説明されることが多いが、これだけでは説明のつかない用例が存在する。

- (35) *Nous nous tutoyions étant enfants. Maintenant, tantôt on se laisse aller à ce tutoiement, tantôt on se retient. On devient timides avec l'âge.*

(SANDFELD, p. 332)

決して口語的な文章ではない。この *on* は *nous* と代えても意味的な差はそれほど大きくない。この *on* の使用はどう説明されるべきか。「動詞語尾の節約」は説明にならない。第1文で話者は *nous* を使用しており、*on se tutoyait* や *nous on se tutoyait* とはしていない。

- (36) *Les batailles avec les grands, ça se passe toujours comme ça, eux, ils nous donnent des gifles et nous on leur donne des coups de pied dans les jambes. Là, on se donnait à plein et tout le monde se battait et ça faisait un drôle de bruit.*

(GOSCINNY, p. 148)

(36) は小学生の言葉を真似た 俗語的な文章である。ここでは「動詞語尾の節約」のために *on* が使用されていると考えられるが、それだけを見るのでは

重要な事実の見落としにつながる。nous on と on の使い分けがなされていることに注意しなければならない。この使い分けはどうか説明されるべきか。

情報の伝達の観点から捉えるならば、(35)(36)は容易に説明が可能となる。(35)では、まず第1の文によって主題(nous)が提示される。後に続く文の連鎖においては主題の変更の必要がない。nousを繰り返すことも可能であろうが、その場合くどくて重い展開とならざるをえない。主題に変更がないことそれだけを示せる主語を立てれば、題述の提示は極めて効率的になる⁹⁾。その点でonは理想的な主語である。話者は主題について暗黙の了解を聴者との間で取り結ぶことができ、しかも空に近い主語を立てることができる。主題に関して聞き誤りがなく、それでいて述部が剥き出しになった文ができあがる。この結果、述部が担う情報が効率的に伝達されるのである。

(36)のnous onとonの使い分けについては次のように説明できる。基本的には、onについては話者―聴者間でそれが表すものについて了解が成立する必要がある。従って、話者がこの了解が成立しないと考える場合、原則としてonの使用はありえない。nous onが使用されている部分では、nousが主題であり、それを提示する必要がある。聞き誤りの恐れのない部分では単独のonが使用されている。nous onはdéictiqueな表現であり、また「動詞語尾の節約」のための表現手段であるが、onはそうではない。onは話者が主語に関する情報を最小限にまで削減し、述部が剥き出しになった文を作り、その述部の情報を効率的に伝達するための表現手段である。

2.3. 情意表現のためのONの使用

話者が事行・事態の主体についての了解の成立を意図的・作為的に無視してonを使用することがある。このときonは特殊な意味合いを帯びた記号となる。主体について了解が成立しない文脈・状況で述部が剥き出しになった文を提示すれば、その主体について様々な想像・推測が及ぶことになり、何らかの

意味が発現するのは当然である。こういう on の使用によって発現する特殊な意味合いを小論では「情意」と呼び、この「情意」を表すための on を「情意表現」と呼ぶ。以下では、まず会話における例、次に小説の地の文に現れる例を取り上げて、情意の発現の様子を見る。

- (37) — ...Pourquoi tu n'as pas peur de moi?
 — Parce que t'es une brave fille, Mouchette!
 — Sans doute. Avec Mouchette *on* prend le plaisir et pas le reste.
 (ふらんす, 08. 1988)

ここでは相手を差すのに 2 人称の代名詞を使うべきである。正確なコミュニケーションを果すためには、発話が誰に関するものかを明示しなければならない場合がある。とりわけ意見や感情を表明し、聴者の反応なり反論なりを待つというような場合がそれであり、人称や指示といった *deixis* がコミュニケーションの重要な鍵となる。この例はこれに当たるにもかかわらず、話者は主体を明示せず、述部の内容をもって当該の発話が聴者に係わるものであるとのめかすような態度を取っている。この態度は何かが含まれた態度である。ここでは、話者の傲慢、相手への侮蔑が現れている。

- (38) — Pourquoi? demanda Anne Desbaresdes.
 — *On* ne sait pas.
 (DURAS, p. 014)

café で騒ぎが持ち上がり、その事情を知ろうと主人公の Anne が居合わせた客の一人に質問する場面である。尋ねられて答える相手は主体を明示しない。質問一応答という発話のやりとりでは、(37) 同様、発言内容の主体を明示し、それを話者が保証する必要がある。尋ねられ、主体を明示せずに応答すれば、何らかの意味が含まれることになる。

- (39) — Ah ça, ça, ça vous avez raison. Ça c'est mon défaut, j'exagère.
 — Ah, je vais me fâcher, maintenant.
 — Je vous redonne un petit bonbon. Avec vous, au moins, *on* ne

s'ennuie pas. *On* s'instruit! Quand je vais raconter tout ça à mes petits enfants...

(ふらんす, 07. 1980)

ここでも発話のやりとりを行いながら、話者が主語の人称を提示しない態度を取っている。正確な伝達、つまり発話の内容が誰に関するもので、誰に向けられているのかについて、これをあえて無視し、空に近い主語を提示するその態度には特殊な意味がある。実際、この場面では *on* は聴者に対する侮蔑を示すものとして使用されているのである。

小説の地の文は「語り」、つまり情報の提供を行う文と言えるが、報道文等と異なり *on* の使用に特徴がある。小説の「語り」では、事行・事態の主体について読者と了解が取り結べる文脈が整っていなくても *on* が多用され、そこに「語り」独特の意味合いが出るようである。

(40) Le téléphérique rouge a commencé de descendre et se perd sous une masse de sapins, puis réapparaît et poursuit son chemin, à la même allure tranquille. *On* le verra remonter et redescendre jusqu'à neuf heures du soir et la dernière fois il ne sera plus qu'une grosse lusiote glissant sur la pente du Foraz.

(MODIANO, p. 010)

(41) *On* a éteint toutes les lampes du salon. Louis, Odile, Viterdo, sa femme, Allard et les enfants attendent autour de la table. La fille de Louis sort de la cuisine en portant le gâteau sur lequel brillent huit bougies: trois pour les décennies, cinq pour les années. Elle marche vers eux et l'*on* chante:
— Happy Birthday to you...

(MODIANO, p. 014)

(42) En bas, *on* s'engouffre au fur et à mesure dans les taxis, mais la file d'attente est toujours aussi longue. Elle seule reste immobile au milieu de cette agitation.

(MODIANO, p. 057)

以上の例では、文脈に不足なものが多く、主体は決して自明とならない。「不定の人々」というのも当てはまらない。これらの例においては主体を明示的に示すこともできるであろうが、それは中立叙述となり、書き手にとっても読み手にとっても魅力のある文章とは言えない。書き手としては、*on* を使用することで様々な読みの可能性を広げることが目的であると思われる。従って、

小説の「語り」における on の使用は特殊な作家の文体技術に属すもので、on の使用の中心に位置するものとは言えない。中心を知って、わざとずれた使用を行う。このずれが文章の味となり、作家の「語り」の特徴となる。

情意表現のための on についてはとりわけ主語の問題が絡んでくる。「正確なコミュニケーションを果たすためには、発話が誰に関するものかを明示する必要がある」という言い方をしたが、会話では実際 on が多用されるのである。これはどう説明されるべきか。ここでは詳述する余裕がないのだが、会話はいくつかの類別されるべきもので、その種類ごとで主語の働きが異なってくるのではないかと筆者は考えている。例えば、聴者の反論を話者が想定せず一方向的な情報の提供という形で行う発話があり、ここでは事行・事態の主体についての了解が成立しやすく、on を主語に立ててごく普通のコミュニケーションを行うことができる。前節までに取り上げた諸例のほとんどすべてがそうである。また、聴者の反論や応答を想定した発話もあり、その場合は事行・事態の主体は明示されなければならない、そうでなければ正確なコミュニケーションが果たされない。本節の例がこれに当たる。本節の例文の主語を on ではなく明示的な表現に書き換えた場合、正確な伝達が果たされ、発話のイメージは大きく変わる。発話が有していた情意は弱まるかなくなることになるからである。

以上の点についてはさらに詳しく考察されなければならない。稿を改めて論じる予定である。

お わ り に

on の代表的な使用と思われる3つのパターンについて考察を進めてきたが、筆者はこの考察の過程の中で、on 使用の研究の要は次の点にあるのではないかという感を強めた。

- 事行・事態の主体が了解可能となるにはどのような文脈・状況が必要か。

これが明らかにできれば、どのタイミングで on が使用可能かを記述することができ、「話者はいかなる場合に on を使用するのか」について説得的な説明を行えるようになる。しかし、単純なアプローチでは解答が出ない問題であることは明らかである。発話行為論、語用論、談話理論等からのアプローチが要請されることであろうが、on が使用されている文脈・状況を分析することで、どのような要素が主体の了解の鍵となるかを洗い出し、それを記述することがその出発点となるであろう。

注

- * 曾我祐典、石野好一の両氏には草稿の段階で有益な助言を頂いた。ここで改めてお礼を申し上げる。
- (1) この章に関する詳細は土井（1989）を参照。
- (2) 出典の明記していない例文は、辞書・文法書に見られるごくありふれた例文もしくは筆者自身が作成した例文である。後者についてはフランス語話者のチェックを受けた。
- (3) 文の主語として設定され、文が表す事行・事態に参加する者を、小論では、「事行・事態の主体」または単に「主体」と呼ぶ。
- (4) on と受動態とを扱った論文として山口（1989）がある。この論考は、情報伝達構造、表現の主観性・客観性、統辞・アスペクト、言語レベルの4つの観点から、受動文と on を用いた能動文の差異を明らかにしようとするもので、とりわけ表現の主観性・客観性に関する分析に興味深いものがある。
- (5) 述語動詞に完了動詞を用いる場合にとりわけそう言える。
- (6) se faire+inf.、代名動詞に関する考えは全面的に林（1987 a, b）に基づいている。
- (7) 杉山（1990）がこの問題を扱っている。「on は談話の中で主題の一貫性を整えるために使用される」とし、豊富な用例を元にこれを実証しようとする優れた考察である。ただ、用例が書き言葉に集中していて、会話における on の分析がほとんどなされていないのが残念である。

参 考 文 献

- ATLANI, F. (1984) : “ON L’illusioniste”, *La langue au ras du texte*, Presses Universitaires de Lille.

- FREI, H. (1966) : *Le livre des deux mille phrases*, Droz.
- NISHIMURA, J. (1984) : *Langue et langage : Manifestation de l'observateur dans la description spatiale*, Thèse pour doctorat de 3^e cycle présentée à l'Université Paris-Sorbonne.
- SANFELD, Kr. (1965) : *Syntaxe du français contemporain, t. I*, Champion.
- TAMBA-MECZ, I. (1989) : “La double énigme de ‘on’ aux concepts de pronom et de personne linguistique en français et en japonais”, *Sophia Linguistica* 27, Sophia University The Graduate School of Language and Linguistics.
- 青木三郎 (1989) : 「人称に関する日・仏語対照言語学的研究」, 『文藝言語研究 言語篇』16, 筑波大学。
- 朝倉季雄 (1955) : 『フランス文法事典』, 白水社。
- 泉 邦寿 (1989) : 『フランス語, 意味の散策』, 大修館書店。
- 杉山友一 (1990) : 「代名詞 ON の用法について」, 『青山フランス文学・語学研究』3, 青山フランス文学・語学研究会。
- 土井隆広 (1989) : 「代名詞“ON”に関する一試論」, 『年報・フランス研究』23, 関西学院大学フランス学会。
- 西村淳子 (1987) : 「不定代名詞“ON”の使用について」, 『立命館文学』501。
- 林 迪義 (1987 a) : 「現代フランス語の受動表現について」, 『ロマンス語研究』20, 日本ロマンス語学会。
- (1987 b) : 「se faire+inf. 構文について」, 『フランス語学研究』21, 日本フランス語学研究会。
- 山口憲男 (1989) : 「受動文と不定代名詞《on》を用いた能動文について」, 『葦』12, 南山大学大学院文学研究科仏文学専攻課程。

例 文 資 料

- DURAS : DURAS, M. (1958) : *Moderate Cantabile*, Les Éditions de Minuit.
- GOSCINNY : GOSCINNY, R. et SEMPÉ, J.-J. (1964) : *Le petit Nicolas*, Denoël.
- GUIDE : CHAMBERLAIN, A. et STEELE, R. (1985) : *Guide pratique de la communication*, Didier.
- MODIANO : MODIANO, P. (1981) : *Une jeunesse*, Gallimard.
- NHK : “Un jeune mousquetaire”, 『NHK ラジオ フランス語講座』, 1981年9月号—1982年3月号, 日本放送協会。
- PAGNOL : 窪川英水 (編訳) (1988) : 『仏和对訳 愛と宿命の泉』, 白水社。
- ふらんす : 「対訳シナリオ」, 『ふらんす』, 白水社。